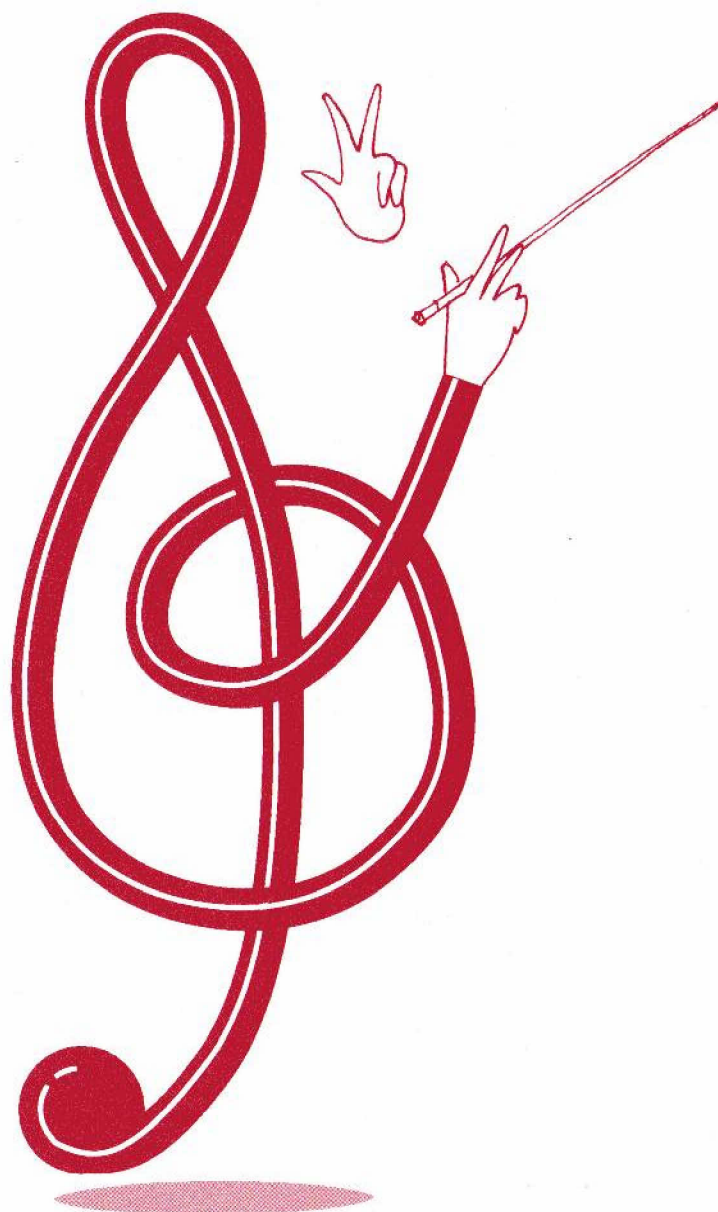


ラジオ
1197



RKK
熊本放送

第37回
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン

第九

第13回

平成7年12月24日(日)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催／熊本県民第九の会・熊本県文化協会
助成／熊本県・(財)熊本県立劇場



熊本県知事
福島 譲二



熊本県立劇場館長
鈴木 健二

第13回ベートーヴェン「第九」演奏会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

この演奏会は、県立劇場の完成を記念して設立された「県民第九の会」の皆様をはじめとしたボランティアの方々の熱意によって、ここまで成長されてきました。数ある「第九」の演奏会の中で、アマチュアのオーケストラによる演奏で、しかも合唱も公募で構成されているというのは、全国的にも珍しいのではないのでしょうか。これも、県民の皆様の音楽に対する造詣の深さによるものと思います。

本県では、「ゆたかさ」と「優しさ」と文化にあふれた県民生活の実現を目指して、様々な施策に取り組むとともに、文化の支援にも努めております。本日御出演の皆様におかれましては、これからも本県文化のさらなる発展のために、御尽力いただきますようお願いいたします。

一年を振り返るこの季節に、ホールいっぱいに広がる歓喜の歌声、私も毎年大変楽しみにしております。本日の御盛會を心から祈念いたします。

「第九」には私は間接的に三つの縁があります。一つは私が生れ育ったのは東京の隅田川近くの下町なのですが、子供の頃に聞いた音楽は江戸情緒豊かな三味線に伴奏される長唄や常盤津でした。夕暮れになると、水面に灯がゆらく屋形船から、しんみりと響いてきました。私の江戸っ子気質を培ってくれました。

ところが、戦後いち早く全国にさきがけて誕生したのが「第九すみだの会」で、第1回のプログラムに私は挨拶文を書かせられましたが、生れ故郷のあまりの変化に驚いたという内容でした。

二つめは、第九が年末に日本で演奏される原因は、私の出身母体であるNHKが、終戦直後の年の瀬に放送したのが契機になったとのことで、昭和40年代に司会をした記憶があります。

そして熊本へ来たら、毎年自分の劇場で第九の大合唱や県民の皆さんによって歌われていたのが、三つめの出会いです。第九は私にとっては素敵な出会いのハレルヤだと思っています。



熊本県文化協会会長
三浦 洋一

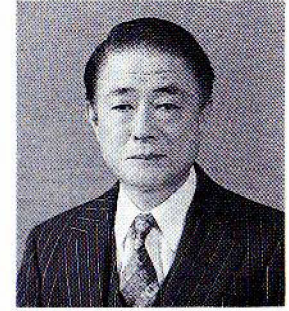
県民第九の会の演奏は毎年熊本の演奏活動の掉尾を飾る行事になりました。

この日に備えて合唱団の皆さんは盛夏の頃から修練を重ねてこられました。なかには私と同年代の友人・知人も参加されています。

巾広い年齢層と職業の県民の関心をこれほど集め、続けることのできる演奏会は他にありません。それだけでも「第九」には人を惹きつけてやまない魅力のあることがわかります。

今回は金洪才さんの指揮で、独唱者には西森由美、妻鳥純子、大島博、大島幾雄の皆さんが出演されます。今までと違った素晴らしい歌声を聞けるのが楽しみです。

熊本は近年音楽のさまざまな分野で全県的な盛り上がりが見られます。合唱王国といわれた熊本の県民第九の会が、1995年度の合唱公演のグランドフィナーレになることを期待し、県民の皆さんと共に大きな声援と拍手を贈ります。



熊本県民第九の会実行委員長
下田 宰城

今年もまた、熊本県・県立劇場並びに県文化協会のご助力を頂き、第13回「第九」演奏会を開催できますことを心から御礼申し上げます。

この演奏会開催に向け、9名の実行委員は幾多の難問に遭遇しながら準備を進めて参りました。時には挫けそうになる諸々の悩みを抱えながら、本番での崇高な歓喜の歌声と、毎年満席のお客様の温かいご支援を励ましとしながら続けることができました。感謝の気持ちで一杯です。

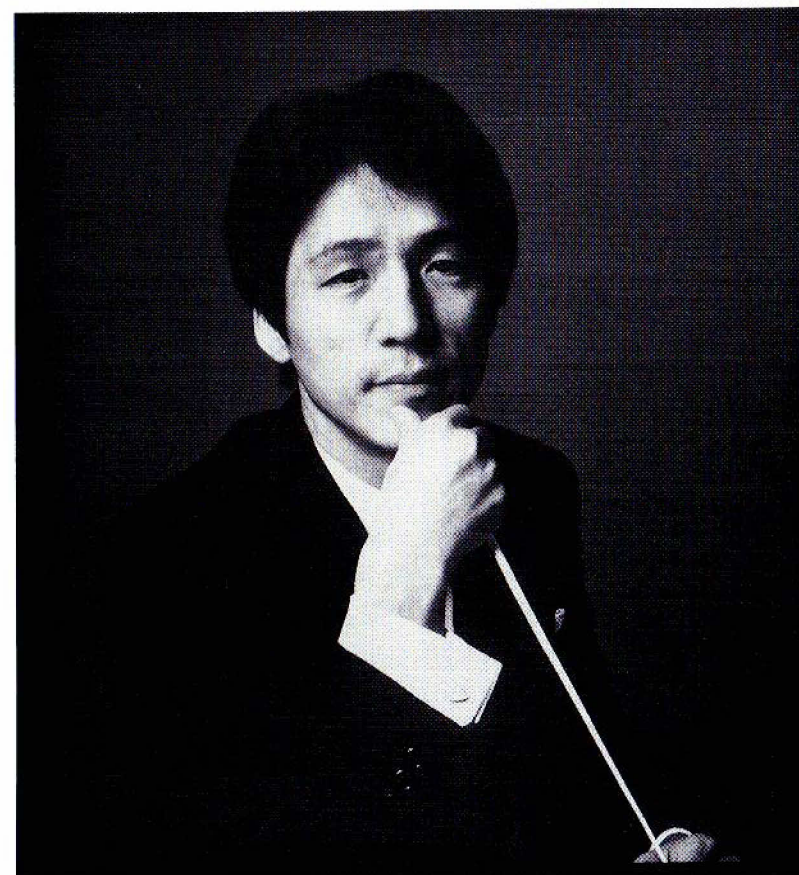
今回は、昨年に続き指揮者に高い音楽性と人格を備えられた金洪才氏とおふたりの地元出身者を交えた四名の素晴らしいソリストの方々をお迎えし、公募による300名の合唱団員の皆さんと、今年創立30周年を迎えられ郷土熊本の誇りとする熊本交響楽団の皆さんにより「歓喜の歌」を謳い上げます。アマチュアによる「第九」が、楽聖ベートーヴェンの真髓にどれだけ触れることができるか疑問です。未熟なところをご寛容頂き、皆様方の温かいご声援とご高評をよろしくお願い申し上げます。

本日のご来場誠に有難うございます。

指 揮 金 洪 才
独 唱 ソプラノ 西 森 由 美
メゾソプラノ 妻 鳥 純 子
テノール 大 島 博 雄
バリトン 大 島 幾 雄
合 唱 熊本県民第九の会合唱団
合唱指揮 林原隆治
工藤勇壹
ピ ア ノ 古閑恵美
真田真澄
浜田志貴
管弦楽 熊 本 交 響 楽 団



平成6年12月25日(第12回熊本県民第九の会演奏会(指揮=金 洪才))から



指 揮 金 洪 才 (キム ホン ジェ)

1954年生まれ。桐朋学園大学音楽学部卒業。指揮を堤俊作、秋山和慶、小澤征爾の各氏に師事。'78年東京シティ・フィル特別演奏会でデビュー。'79年国際指揮コンクールで第2位と、初めての特別賞(斎藤秀雄賞)受賞。'80年、テレビ番組「オーケストラがやってきた」専属指揮者に選ばれ、'81年にはNTV系「私の音楽会」の専属指揮者として読売日響も指揮。以後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団の指揮者を歴任の傍ら、東京都交響楽団をはじめ、全国主要オーケストラを客演指揮し、内外の著名なソリストとも共演してその優れた音楽性と鮮やかな指揮は好評を博してきた。'89年よりベルリンにおいて著名な作曲家、尹伊桑(ユン・イサン)氏の下で研鑽を積む。'92年9月には、ニューヨーク・コリアン交響楽団を指揮して、カーネギーホールでアメリカデビューを果し、成功をおさめた。

西森 由美(にしもり・ゆみ)
ソプラノ



熊本県出身。東京芸術大学卒業。オペラ研修所第5期修了。二期会オペラスタジオ修了時、最優秀賞及び川崎静子賞を受賞。原田茂生、菊地初美の各氏に師事。

「魔笛」のパミーナ、「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージ、「ドン・ジョヴァンニ」のドント アンナ、「フィガロの結婚」のバルバリーナ等、モーツァルトの音楽の純粋性をその清潔で美しい声で表現してきた。

さらに、文化庁こども芸術劇場「ヘンゼルとグレーテル」ではグレーテル、二期会オペラ公演「タンホイザー」の牧童と、魅力的な女性から純真な子供までを演じ分ける力を持つ。オペラに賭ける情熱はひとかたならぬものがあり、その後も「ペレアスとメリザンド」のメリザンド、「ヘンゼルとグレーテル」のグレーテル、さらには熊本県民オペラ「細川ガラシャ」でタイトルロールを歌い、新境地をひらいた。来年1月12日に、地元水俣市でリサイタルを予定している。二期会会員

妻鳥 純子(めんどり・すみこ)
メゾ・ソプラノ

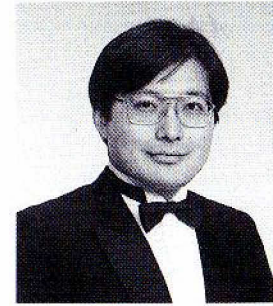


大分県立芸術短期大学卒業。東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修了。第42回日本音楽コンクール第3位、海外派遣コンクール松下賞受賞。ミュンヘン音楽大学に留学。藤原武、首藤迪子、ロドルフォ・リッチ、中山悌一、フランツ・ミクサ、ヘルタ・テッパーの諸氏に師事。オペラ「カルメン」、「フィガロの結婚」、「修道女アンジェリカ」、「ヴァルキューレ」、「神々の黄昏」に出演。「第九」、「メサイア」等のコンサートの他、ドイツリートを中心にしたプログラムでリサイタルを行っている。'92年、'95年宮本亜門演出の東宝ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」に修道院長の役で出演。好評を得る。

現在、玉川大学 武蔵野音楽大学非常勤講師

二期会会員 日本フォーゴロー・ヴォルフ協会同人

大島 博(おおしま・ひろし)
テノール



熊本県生まれ。中央大学法学部卒業後、'81年東京芸術大学声楽科に入学。芸大では、渡辺高之助、高 丈二、中山悌一、原田茂生の諸氏に師事。

'84年安宅賞受賞。'86年、同大学院在学中にミュンヘン音楽大学に留学、E. ヘフリガー氏に学ぶ。'89年芸大大学院博士課程に進学。同年第10回国際シューマン・コンクール第4位。'90-91年D. フィッシャー・ディースカウ氏に師事。同氏の推薦により、クラウディオ・アバド指揮、'91年ベルリンフィル・ジルベスター・コンサートに出演した。

'94年2月には、「Performance Today」シリーズにおいて、「ゲーテの詩によるリートの日」を開催する等、ドイツ・リート演奏も活発に行っており、熊本でも'93年以来、毎年5月にリサイタルを開いている。

近年は、さらに現代音楽の分野にも活動の場を広げており、'94年5月には、スロヴァキアにおいて、P. マルテンチェクの、テノールとピアノのためのモノ・オラトリオ、「イエス・キリストの黙示録」の世界初演を手がけた。'95年3月、東京芸術大学より博士(音楽)の学位を授与される。

大島 幾雄(おおしま・いくお)
バリトン



1974年桐朋学園大学卒業。1978年オペラ研修所第1期生修了。萩谷 納、伊藤武雄の両氏に師事。美声と豊かな音楽性は高く評価され、1979年第7回ジロー・オペラ賞を受賞。同年11月より文化庁派遣芸術家在外研修員としてミラノに留学しさらなる研鑽を積んで翌1980年に帰国した。

オペラには1975年ラヴェル「スペインの時」ラミーロでデビュー。早くからバリトンの逸材として注目を浴びその後「フィガロの結婚」「ルチア」等の二期会オペラに次々と主演。85年には難役といわれるベルクの「ヴォツェック」タイトル・ロールで見事な歌唱を聴かせ、一躍その評価を高めた。94年7月には、至難な技術を要する「トロヴァトーレ」のルーナ伯爵を見事に演じ、その的確な役作りと魅力的な歌唱は高い評価を受けた。またコンサート歌手としても多くの実績を持ち、ベートーヴェン「第九交響曲」を始めとしてバッハ、ヘンデル、ブラームス、フォーレなどの宗教曲から、マーラー、オルフまで幅広い作品のソリストとして、内外の著名な指揮者やオーケストラと共演しており、その実力はおおいに認められている。

二期会会員

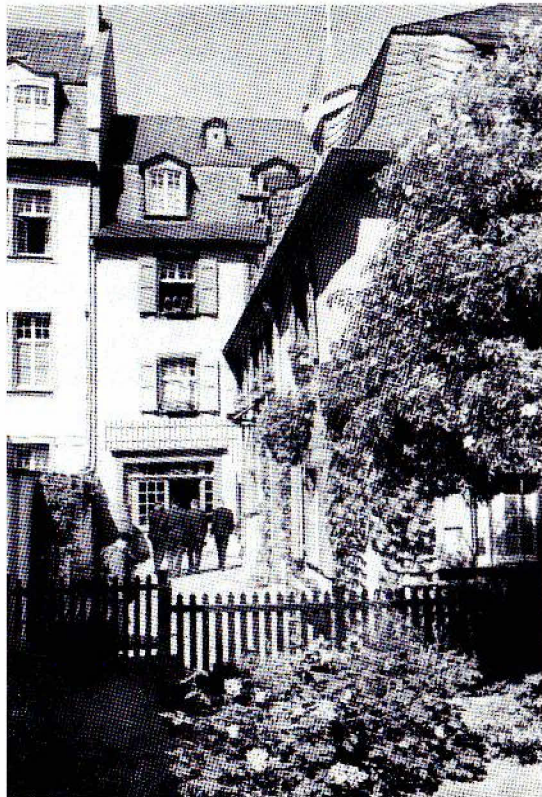
1. モテット“アヴェ・ヴェルム・コルプス”K.618

モーツァルト

2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」

ベートーヴェン

- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso
第2楽章 Molto vivace
第3楽章 Adagio molto e cantabile
第4楽章 Finale

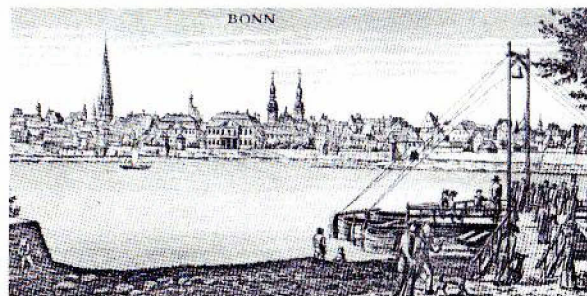


ベートーヴェンの生家(ボン)

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子は、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手にとるようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー=《歓喜に寄す》

対訳=大宮貞琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such'ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう!

バリトン独唱・合唱

- ① 歓びよ、神々のうらわしい輝きよ!
楽園の娘らよ!
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう!
- ② この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋(はらから)となる。

四重唱・合唱

- ③ 大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情を勝ち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え!
- ④ しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば!
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい!

四重唱・合唱

- ⑤ すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
- ⑥ 歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

- ⑦ 歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧ 同朋(はらから)よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合唱

- ⑨ たがいに取り合おう、億万の人々よ!
この口づけを、全世界にあたえよう!
同朋(はらから)よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ ひれ伏して祈るか? 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか? 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう!
星たちのうえに、主は住み給うのだ!

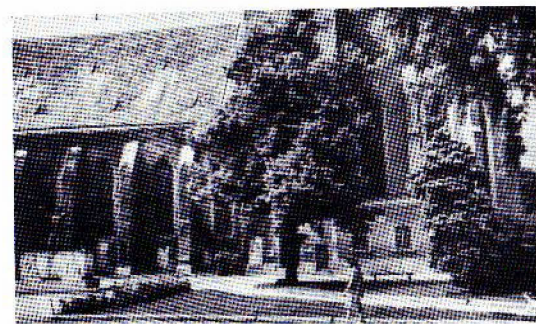
1. モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」K.618 モーツァルト

モーツァルト晩年の1791年夏、歌劇「魔笛」の作曲の合間をぬって書かれたものである。当時、妻のコンスタンツェはバーデンで病氣療養中であったが、多忙なモーツァルトは妻を見舞ってやることもままならぬ状態であった。そんなとき献身的に世話をしてくれたのが、当地の合唱指揮者で教師でもあったアントン・シュトールであった。シュトールは、かねてからモーツァルトの音楽に熱烈な尊敬を抱いていた。モーツァルトはこれを知り、シュトールの好意に感謝してこの曲を書き贈ったのだ。

簡素な編成による小品ながら、ア・カペラ様式を思わせる深く静かな響きのうちにモーツァルトの敬虔な信仰が余すところなく表現され、極めて清浄化された宗教的な世界を描き出している、聞く者を深い感動に誘わずにはおかない。

歌詞は、14世紀の法皇インノケンティウス四世の作と伝えられる聖体の讃歌。「めでたし、まことの御体、十字架上に犠牲となられ、われらのために血を流したもう。」

アダージョで書かれているこの曲は、小規模な編成にもかかわらず、歌詞の持つあらゆる詩的な可能性がそこで音楽的に使い尽くされているといっても過言ではない。



アヴェ・ヴェルム・コルプスを初演したバーデンの教会

2. 交響曲第9番 二短調作品125「合唱付き」 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終わったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである……」と言っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことか、思い出がつとに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が日ざめるかのように思われる…」と言っている。

【第四楽章】 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめ。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組み合わせられて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「熊本県民第九の会」実行委員会

顧問	有馬俊一	委員	神田一伸	黒葛原 潔
委員長	下田宰城		草刈秀克	林原隆治
			草刈秀士	本山 洋
			田北洋康	山崎崇伸

熊本交響楽団

KUMAMOTO SYMPHONY ORCHESTRA

熊本県民第九の会演奏会記録

※は同時演奏曲

〈コンサートマスター〉

山崎 崇伸

〈1stヴァイオリン〉

東 恭子

内田 衣伊子

小野 智恵里

笠置 哲敬

古閑 文子

斎藤 友美賀

龍野 珠美

黒葛原 契子

黒葛原 康子

鶴 和美

鶴 千春

友松 信吾

長坂 浩子

藤本 佳澄

山崎 崇伸

吉田 和子

〈2ndヴァイオリン〉

岩下 史

上野 暢子

浦上 郁子

恵口 香織

岡 純子

交野 雅代

清田 みずほ

坂下 真弓

高木 信雄

田上 るみ子

長野 衣里子

織川 明子

東 真知子

古屋 弓子

松岡 千平

松崎 浩二

本山 洋

柚原 三弥子

〈ヴィオラ〉

安部 和歌葉

池辺 京子

上野 久美

緒方 肇

岡田 桂

北澤 孝治

清元 晃

甲田 啓子

辰野 陽子

黒葛原 潔

土井 智広

中村 衣井子

野尻 晃一

丸野 真司

吉田 美智子

鷲山 法雲

〈チェロ〉

石垣 博志

片山 玲子

高木 成子

槌田 博文

長尾 和治

永倉 照恵

長坂 輝喜

野島 秀司

広田 公美子

福永 憲包

佛淵 かつよ

佛淵 信夫

本田 義信

松永 尚子

三浦 純子

宮崎 すみれ

山中 朗史

〈コントラバス〉

東 康二

国米 稔

塩田 英治

田上 博子

歳田 和彦

中川 裕司

平川 和秀

遊川 伊知郎

〈フルート
ピッコロ〉

猿渡 みか

田中 里奈

山口 邦子

〈オーボエ〉

辰野 裕昭

橋本 寿一

宮本 千草

〈クラリネット〉

黒木 健次

高野 栄次

〈ファゴット
コントラファゴット〉

小田 穂積

小林 太郎

高木 群之

〈ホルン〉

相良 博

猿渡 伸之

田中 禎子

田畑 博之

安松 真司

山口 亮二

〈トランペット〉

豊田 恭司

永廣 正治

堀江 幸司

〈トロンボーン〉

出口 貴浩

原田 勝徳

古澤 浩幸

〈打楽器〉

小野上 真樹

白尾 友宏

早川 武志

福島 好

第1回 昭和57年12月28日(火)

指揮 山田 一雄

独唱 新 圭子

木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一

※越天楽(雅楽).....近衛 秀磨(編曲)

第2回 昭和58年12月11日(日)

指揮 大友 直人

独唱 高見久美子

岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介

※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲.....ワーグナー

第3回 昭和59年12月27日(休)

指揮 山岡 重信

独唱 中沢 桂

木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹

※弦楽のためのアダージョ 作品11.....バーバー

第4回 昭和60年12月25日(水)

指揮 フランティシエック・ワイナール

独唱 三縄みどり

妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男

※「レオノーレ」序曲第3番 作品72.....ベートーヴェン

第5回 昭和61年12月27日(火)

指揮 荒谷 俊治

独唱 津下美奈子

木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 靖夫

※トッカータとフーガ 二短調.....バッハ〜ストコフスキー

第6回 昭和62年12月26日(土)

指揮 安永武一郎

独唱 中沢 桂

木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信

※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン

第7回 昭和63年12月25日(日)

指揮 安永武一郎

独唱 三縄みどり

木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦

※「コリアラン」序曲ハ短調 作品62.....ベートーヴェン

第8回 平成元年12月24日(日)

指揮 小松 一彦

独唱 秋山恵美子

木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三

※「プロメテウスの創造物」序曲 作品43.....ベートーヴェン

第9回 平成2年12月23日(日)

指揮 粉山 和明

独唱 山田 綾子

木村 宏子 大野 徹也 福島 明也

※「ロザムンデ」序曲 作品26 D797.....シューベルト

第10回 平成3年12月23日(月)

指揮 安永武一郎

独唱 西森 由美

木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾

※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン

第11回 平成5年12月23日(休)

指揮 荒谷 俊治

独唱 河添富士子

春日 成子 小林 彰英 栗林 義信

※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲.....ワーグナー

第12回 平成6年12月25日(日)

指揮 金 洪才

独唱 岩永 圭子

妻鳥 純子 饗庭 知昭 勝部 太

※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン

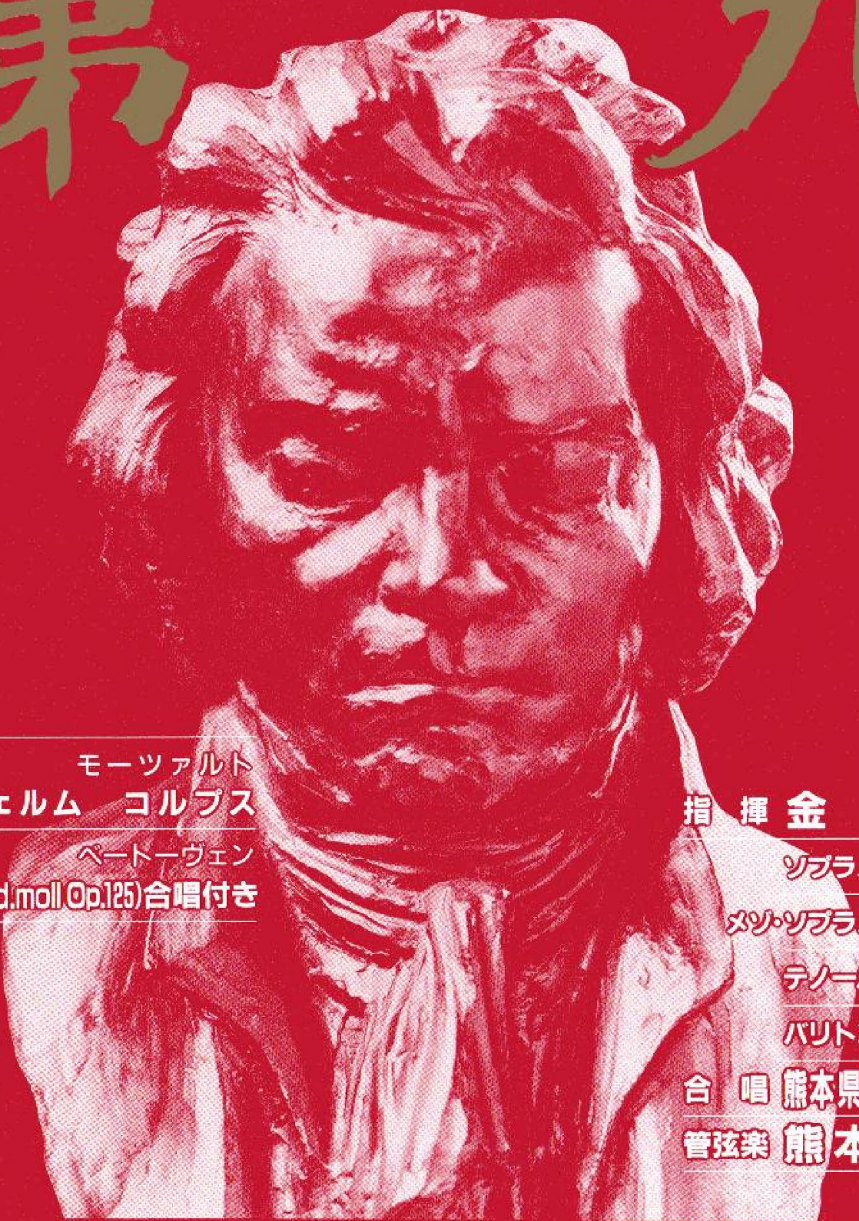
第37回

熊本県芸術祭参加

(第13回)

ベートーヴェン

第九



曲目

モーツァルト
 アヴェ ヴェルム コルプス
 ベートーヴェン
 交響曲第九番(d.moll Op.125)合唱付き

1階席 3,000円
 2階席 2,500円
 3階席 2,000円

指揮 金 洪 才
 ソプラノ 西森 由美
 ヌットソプラノ 妻鳥 純子
 テノール 大島 博
 バリトン 大島 幾雄
 合唱 熊本県民第九の会合唱団
 管弦楽 熊本交響楽団

12/24(日)午後6時30分開演
 熊本県立劇場コンサートホール

■主催/熊本県民第九の会・熊本県文化協会 ■助成/熊本県・(財)熊本県立劇場
 ■入場券は、11月12日より県立劇場および市内各プレイガイドにて発売します。
 (KNサービス・熊本交通センター・大谷楽器・西野楽器・熊本県立劇場)
 ■お問い合わせ先/熊本県民第九の会事務局 ☎096(345)7285

ベートーベン交響曲第九番第四楽章を高らかに響かせる県民第九の会合唱団と熊響、ソリストたち=24日夜、県立劇場



「歓喜」の願い 来年に託し...

「第九」合唱

県民の会 歌声響く

県立劇場

年末恒例のベートーベン「第九」演奏会が二十四日夜、熊本市大江の県立劇場で開かれた。県民第九の会・県文化協会主催。

同劇場の完成を記念して昭和五十七年に始まった同演奏会は、今年で十三回目。県内から公募した高校生から八十六歳までの合唱団約三百人は、夏から毎月数回の練習を積み重ねてきた。

指揮は昨年引き続き、東京シティ・フィルなどを歴任した金沢才(キム・ホンジエ)氏、オーケストラは熊本交響楽団の約百人。ソリストは西森由美(ソプラノ)、妻島純子(メゾソプラノ)、大島博(テノール)、大島幾雄(バリトン)ら。

の四氏を招いた。

クリスマススイアにふさわしく、一曲目はモーツァルト「アヴェ・ヴェルム・コルプス」。十字架上のキリストをたたえる合唱曲を披露した。

続く「第九」では、第三楽章を前にソリストと大合唱団が入場。クライマックスの第四楽章で、ドイツの作家シラーがヒューマニズムの理想を掲げた「歓喜に寄せて」を高らかに歌い上げた。

戦後五十年目の今年は阪神大震災やオウム事件などで揺れた。一年を振り返り、来る年への明るい期待を込めた演奏に、聴衆からは盛んな拍手が送られた。